

すべての作物に石灰窒素を使用
～鶏ふんの臭気を抑え
タネバエの発生が減少～

青森県下北郡東通村上田屋

中里 一昭 氏



30年以上にわたりねぎを栽培

東通村は本州北東端に位置し、津軽海峡と太平洋に面する、むつ市と隣接する村である。

また、村内には、全国的に有名な寒立馬が放牧されている尼崎灯台がある。

私が当地を訪れたのは11月初旬の曇天で雨模様の日であったが、この時期にしては気温が高かった。

今回は、青森県下北地域県民局地域農林水産部普及指導室の對馬副室長に同行願い、古くからねぎの栽培が盛んな東通村の上田屋地区で、30年以上にわたりねぎを栽培しつづけている篤農家中里一昭さんをお訪ねした。

中里さんは、自宅から数百メートルのところにある約80aの畑で、40aにねぎ、残りの40aにはくさい、キャベツなどを作付けし、1年ごとに反転させて連作を避けている。ほかに、自宅敷地内のハウスおよび露地で、ほうれんそうの周年栽培にも取り組んでいる。

鶏ふん＋石灰窒素で腐熟促進

土づくりとしては、近くにある養鶏場から無料で入手できる生鶏ふんを毎年4月に1～2t/10a投入後、石灰窒素を40kg/10a全面に散布・耕起して腐熟促進を図っている。その後、基肥として野菜用の化成肥料を、ねぎには全面に散布・耕起し、はくさい、キャベツには植え溝に施用している。

中里さんは、すべての作物に石灰窒素を使用しており、とくに、ねぎ栽培でタネバエの発生が減少したとのことであった。これは、石灰窒素を使用することで生鶏ふんの臭気を抑えタネバエ成虫の誘引を妨げ、結果としてタネバエの発生を抑え被害が軽減されていると思われる。

ねぎは5月初旬に播種し、7月下旬から11月中下旬まで収穫作業がつづくそうである。通常はご夫婦と息子さんと作業をおこない、繁忙期には親戚など近隣の方々の応援を得て対応し、収穫した野菜の大部分は、地元むつ市の市場に直接出荷している。

雨の中、圃場までご案内いただき細部にわたる説明をいただいたことに感謝しつつ、上田屋地区をあとにした。